

いる名前をあげれば、若山牧水、種田山頭火から、戦後の太宰治、坂口安吾、しんがりは中上健次だろうね。歌人でいえば、北原白秋や前田夕暮もよく飲んだらしかつた。エピソードがたくさん残っている。そういう時代がずーっと続いた。僕が編集者をやったのはそういう時代の最後の時期なんだろうと思う。モノを書く人間は、酒を飲む人間が八割くらいいて、全然飲まない人は本当に少なかったような気がする。だから、「何年か先に長編小説を出しませんか」とか、「一年間の小説連載をお願いします」といった大事な話をするときはず、酒場だった気がする（笑）。

俺が河出書房に入ったのは、前にも話したけど、早稲田短歌会の先輩だった河出朋久さんの家に遊びに行ったとき、お父さん（河出書房の創業者・当時の社長・河出孝雄氏）が「河出に来ませんか」って誘ってくれたのがきっかけだった（「ほろ酔いインタビュー」第四回、第六回など）。

奥田 一九六六年、先生が二十七歳ですね。幸綱 河出書房に入ると決まって、最初に会ったのが、埴谷雄高さんとまだ小説家デビュー前の高橋和巳さんだった。河出書房の先輩と飲んでいて、偶然にこの二人と出会った。新宿だったね。で、「一緒に飲も

うよ」ということで、飲みに行った。茉莉花というバーだったと思う。そのとき初めて、「文士」という人種といつしよに酒を飲んだんだ（笑）。

高橋さんのことは全然知らなかった。デビュー作の『悲の器』を出す前の時期だったと思う。記憶では、『悲の器』は書き上げていて、埴谷さんに読んでもらっていたのだった気がする。高橋さんは埴谷さんを、教祖と信者みたいな感じで心酔しておられた（笑）。俺も埴谷さんは神様みたいな人だと思っていて、これが実物の埴谷雄高かあ、と思った。

高橋さんはそれから売れて、全共闘時代には河出書房の看板スターになって、ずいぶん原稿を書いてもらったな。高橋さんはすごい酒飲みだった。四十歳で亡くなられるわけだけど、毎晩、べろべろになるまで飲んでいて、原稿の締め切りがあっても、「あと二十枚くらい書かなくちゃ」なんて言いながら、まだ飲んでいて、『高橋和己全集』は全二十巻あるから短い期間にすごい量を書いたわけだけど、酒の量もすごかったと思う。結腸ガンで亡くなられる（一九七一年）。葬儀委員長は埴谷さんがつとめられた。青山斎場に俺も行ったな。

▽ああ、文学をやっている！

幸綱 埴谷さんとはその後も、何度か一緒にした。『死霊』という大長編小説が有名だね。部分的には読んでけど、全部は読めなかった（笑）。

